

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 3 日現在

機関番号：32808

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530837

研究課題名(和文) 縦断的調査による中学生における自己概念の発達

研究課題名(英文) The development of self-concept in junior high school students: A longitudinal study

研究代表者

佐久間 路子 (SAKUMA, Michiko)

白梅学園大学・子ども学部・教授

研究者番号：30389853

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、中学生を対象に、自己概念の内容や評価に関する質問紙調査およびインタビュー調査を、縦断的に実施することを通して、青年期前期の自己概念の発達の变化を検討したものである。結果として、発達にともない自己を否定的に捉えるという傾向は、横断的および縦断的分析において、あまり明確には見られなかったこと、また自己描出の内容については、すべての学年で外向性に関する言及の割合が高いことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This study longitudinally examined the development of self-concept in junior high school students through questionnaire surveys and interviews about the content and evaluation of self-concept. Self-evaluation did not clearly tend to become more negative with age, in both cross-sectional and longitudinal analyses. Further, students' self-description pertaining to extroversion was common in all age groups.

研究分野：教育心理学

キーワード：自己概念 中学生 縦断的調査 質問紙 インタビュー

1. 研究開始当初の背景

自己概念の発達に関しては、これまでに Damon & Hart(1988)による自己理解モデルや Harter(1999)による認知社会的構成概念としての自己の発達モデルが示されている。また佐久間(2006)は、幼児期・児童期を対象にしたインタビューおよび青年期を対象とした質問紙調査によって、幼児期から青年期にかけての自己概念の発達モデルを実証的に示している。このような発達の变化を明らかにするためには、縦断研究が不可欠であるが、これらの研究のほとんどは、横断的な調査に基づいているのが現状である。そこで佐久間は、幼稚園年長児から小学校6年生にかけて7年間にわたり縦断的調査を行い、幼児期から児童期にかけての自己概念の発達モデルを検討してきた(2005～2006年度科学研究費補助金若手研究(B)17730393 および 2007～2009年度科学研究費補助金若手研究(B)19730419 他)。そしてこれまでに幼児期や小学校低学年では自己の成長を肯定的に捉えている(佐久間,2007)が、小学校中学年になるとやや否定的に捉える子どもがいること(佐久間,2008)、学年が高いほど自己を否定的に捉えるようになること(佐久間,2010)や、肯定・否定の両側面から捉えるようになり、勤勉性や外向性に関する記述が増えること(佐久間,2011)を明らかにしており、児童期までの発達については、研究の蓄積が進んでいる。しかし中学生(青年期前期)以降を対象とした縦断的調査による研究は、幼児期から青年前期にかけてのコンピテンスの発達に関する研究(藤崎・高田,1992; 藤崎, 1999)などの報告はあるものの、自己概念の発達の变化についてはほとんど検討されていない。

Harter(1999)によると、青年期前期の自己概念は、他者との相互作用や、社会的魅力に影響を及ぼす対人的属性と社会的スキルが中心であり、具体的には、話し好き、さわがしい、おもしろい、かっこいいなど、仲間から好感を持たれるような属性が含まれる。そして青年期中期を過ぎ、青年期後期になると、個人の信念、価値、基準を反映した属性が内化され、それに基づいた描出がなされるようになる。また Damon & Hart(1988)は、青年期前期から青年期後期にかけて、自己理解のレベルは「対人的意味づけ」から「体系的信念と計画」に移行すると述べている。さらに佐久間(2006)は、中学生・高校生・大学生を対象として、外向性、協調性、勤勉性に関する特性語の評定によって自己概念を調査し、中学生は高校生や大学生に比べて、外向性の得点が高く、勤勉性が低いことを明らかにしている。つまり青年期前期はそれ以降の時期に比べて非常に外向的であり、対人的魅力や仲間からの受けの良さが、自己の中心的属性になっていることが示唆されている。加えて、評価的側面に関しても、中学生の時期にコンピテンスの自己評価が低下する傾向(藤崎・

高田,1992; 藤崎,1999)や、自己受容の程度が低下する傾向(加藤,1977)が認められている。

このように青年期前期は、他の時期と比較しても特徴的な発達を見せる時期であるが、児童期が終わり青年期に入ったばかりの時期から高校生になるまでの青年期前期の数年間の中で、自己の理解にどのような変化が起こるのかは、詳細に検討されていない。上記のように、他の時期に比べて、対人的属性への関心が高まることとされているが、外向性に関しては、児童期後期からすでに関心が高まることと示されている(佐久間, 2011)。しかし児童期後期と青年期前期では、外向性が意味する内容が異なる(例えば、児童期では単に明るさやおもしろさを意味するが、青年期前期では対人的魅力を意味するなど)という可能性も考えられ、その違いについては検討されていない。また小学校高学年では、勤勉性への関心が高いことが示されており(佐久間, 2011)、Erikson(1959)の発達段階においても児童期の危機は「勤勉性対劣等感」であると述べられ、研究的関心も高い。しかし青年期に入ると、外向性と比較して、勤勉性は研究課題として取り上げられることが非常に少ない。自己の特性としての重要度は下がることは推測されるが、青年期前期においても、誠実さやまじめさに対する関心は引き続き高い可能性も考えられ、勤勉性への関心がどのような発達の变化を見せるのかは検討されていない。加えて、青年期では、コンピテンス(藤崎・高田,1992; 藤崎,1999)や自己受容(加藤,1977)が低下することが示されており、自己理解が「対人的意味づけ」のレベルに入った青年期前期において、どのような側面で自己の肯定的認識が減少し、否定的な認識が増えていくのを検討する必要があると考えられる。さらに青年期には、「本当の自分(true self)」や「にせの自分(false self)」についての認識が生じることが報告されている(Harter,1999 ほか)。しかし、これまでの研究ではそうした認識がいつ頃生じることかということは示されていない。このように中学生の自己概念の発達については、いまだ検討されていない点が多く存在する。

2. 研究の目的

本研究では、中学生を対象に、自己概念の内容や評価に関する質問紙調査およびインタビュー調査を横断的・縦断的に実施することを通じて、以下の3点を検討する。

- (1) 青年期前期において自己評価が否定的になることが予想されるが、どのような時期に、どのような側面で自己の肯定的認識が減少し、否定的認識が増加するのか。
- (2) 中学生において自己に関する具体的な描出内容はどのように変化するのか。
- (3) 本当やにせの自分についての認識がどのように生じてくるのか。

3. 研究の方法

(1) 質問紙調査

対象者：第1回質問紙調査（平成25年3月）は、中学校4校の中学生約600名。第2回質問紙調査（平成26年2～3月）は、継続対象校1校と新規対象校1校の中学生約400名。第3回質問紙調査（新規対象1年生の1回目のみ平成26年6月、その他は平成27年1月～3月）は、継続対象校2校の中学生約400名を対象に実施。

調査方法：担任教諭を通じて質問紙を配布し、回答してもらった。回答後は、各自封筒に入れてもらい、回収した。

質問項目：1)自分のことがすきか（「すき」「どちらかといえばすき」「どちらかといえばきらい」「きらい」の4段階から1つ選択）。2)好きなところはあるかないか（ある場合は具体的な内容を記入）。3)嫌いなところはあるかないか（ある場合は具体的な内容を記入）。4)自己の真正性に関する意識（人との関わりに応じて自分が変化する、人には見せない「本当の自分」がある、人に対して「にせの自分」を示すことがある、人が考えている自分と自分が考えている自分とにずれがあるという質問について意識したことがあるかないかを選択し、ある場合は意識し始めた時期を回答）。5)児童用コンピテンス測定尺度（桜井，1999）：10項目4段階評価。

(2) インタビュー調査

対象者：質問紙調査を縦断的に実施している中学校の中学1年生55名を対象として、各年度の3月（質問紙調査実施後）に3年間に渡り縦断的に行った。

調査方法：放課後に面接者が中学校を訪問し、学校の空き教室において、中学生と面接者の1対1で約15分間のインタビューを行った。面接は同時並行的に複数の面接者（研究代表者、研究分担者、連携研究者および大学院生など5名）で行った。面接内容は録音をして、それをもとに逐語記録を作成した。

質問項目は、現在の自分（自分の好きなところ、いいところ、理想の自分）、1学年前の自分からの変化、1学年後の自分への変化、自分に関する意識（人には見せない「本当の自分」があるか、人に対して「にせの自分」を示すことがあるか）についてたずねた。

4. 研究成果

以下では、目的(1)に関して、調査対象者が最も多かった1年目の質問紙調査の横断的比較と、2年目と3年目に実施した縦断的比較結果を、目的(2)については、インタビュー調査の1年時と2年時の縦断的比較結果を、目的(3)については、質問紙調査及びインタビュー調査の両方についてまとめる。

(1) 1年目質問紙調査の横断的比較結果

対象者：中学校4校の中学生614名。

自分のことがどの程度好きか：「きらい」

を1点、「すき」を4点というように1～4点に得点化し、学年および性別を独立変数とした2要因分散分析を行ったが、有意な主効果および交互作用は見られなかった。

すきなところ・きらいなところの有無：すきなところが「ある」「なし」、きらいなところが「ある」「なし」に対する回答を、「すきのみ」、「すき・きらいの両面あり」、「きらいのみ」、「両面なし」の4群に分類し、学年×4群、性別×4群のクロス表を作成し、²検定および残差分析を行った。その結果、1年生よりも3年生の方が「両面あり」が多く「きらいのみ」が少ないこと、女子は「両面あり」と「きらいのみ」が多く、男子は「すきのみ」と「両面なし」が多いことが明らかになった（Figure 1参照）。

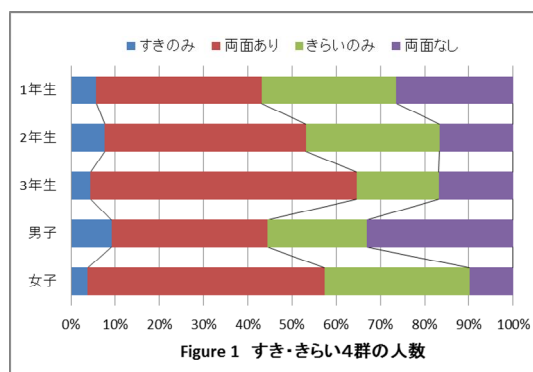


Figure 1 すき・きらい4群の人数

児童用コンピテンス測定尺度：10項目の計算平均を算出し、学年および性別を独立変数とした2要因分散分析を行ったところ、性別による主効果のみが明らかになり、男子の方が女子よりも有意に得点が高かった。さらにすき・きらいの有無の4群によってコンピテンス得点に差が見られるかを検討するために一要因の分散分析を行ったところ、主効果が有意であり、「すきのみ」「両面あり」「両面なし」「きらいのみ」の順に得点が高かった。

以上より、学年による差は、3年生の方が自己を好き嫌いの両面から捉えるという点のみだけで見られ、その他の差は見られなかった。一方、性別による差は、女子の方が「きらいのみ」が多く、コンピテンス得点が低いことから、女子が男子よりも自己をより否定的に捉えていることが明らかになった。

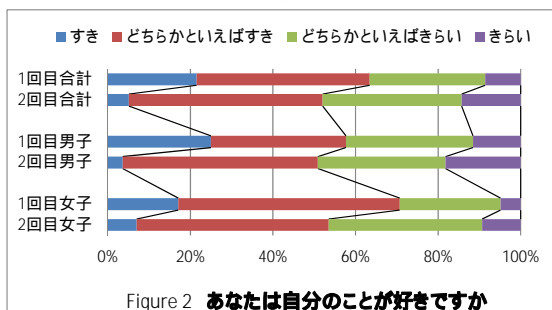
(2) 質問紙調査の縦断比較結果（2年目と3年目に実施した1校分の結果）

対象者：2014年度1年生89名（男子50名、女子39名）、2013年度1年生 - 2014年度2年生80名（男子40名、女子40名）、2013年度2年生 - 2014年度3年生75名（男子33名、女子42名）

調査時期：2014年度1年生については第1回2014年6月、第2回2015年1月。2013年度1,2年生は、第1回2014年2月、第2回2015年1月

結果：自分のことがどの程度好きかと児童用

コンピテンス得点について、第1回調査と第2回調査を縦断的に比較したところ1年時と2年時、2年時と3年時については、有意な差が見られなかった。しかし1年生では、両得点ともに1回目(6月)よりも2回目(1月)の方が有意に得点が低かった(Figure 2)。以上より自己評価が否定的になるという変化は、1年生の1学期から3学期の間に生じる可能性が示唆された。



(3) インタビュー調査の縦断的比較結果

対象者：中学校1校の1年時(回答者は52名)と2年時(回答者は53名)

描出内容の学年差について：中学生の描出を佐久間ら(2000)の分類カテゴリに沿って分類し、中学1年時と2年時で比較を行った。身体・外的属性、行動、人格特性という上位カテゴリについて、各学年時の描出を比較したところ、身体・外的属性は1年時5.0%、2年時2.8%とともに少数であった。行動は1年時が46.7%、2年時48.6%と両時点で最も多く、人格特性は1年時20.0%、2年時は25.0%であり、2年時の方がやや多かった。中学生の描出を下位カテゴリに分類し、各学年時でどのような言及が多いのかを比較した。行動の下位カテゴリに関しては、能力に関する行動の言及割合は、1年時で42.9%、2年時28.6%、協調的行動は、1年時で28.6%、2年時25.7%、勤勉的行動は、1年時で10.7%、2年時17.1%であった。1年時は能力に関する言及が多く、2年時では能力と協調的行動の言及が多かった。人格特性の下位カテゴリでは、1年時は外向性への言及の割合が66.7%と非常に高く、2年時でも44.4%と多かった。これらの結果は、佐久間(2012)の児童期後期の特徴と一部共通していた。好きなどころが「ない」と回答したものは、1年時と2年時ともに17名(対象者の約26%)であった。「わからない」という回答は、1年時と2年時ともに3名(約6%)だった。

描出内容の縦断的比較：1年時と2年時で描出内容が変化したかどうか、1年時と2年時の両時点で回答がみられた50名について、個人ごとに比較を行った。その結果、変化したのは35名(70.0%)、変化しなかったのは15名(30.0%)であった。変化した35名のうち、1年時「ない」と回答したが2年時で回答がみられたものが5名(10.0%)、1年時に回答がみられたが2年時で「ない」と回答したものが5名(10.0%)だった。描出内容が変化した

ものは25名(50.0%)であった。そのうち回答内容が1年時と2年時で異なるもの(例：1年時「すぐ友達ができる」、2年時「努力している」)が17名であり、その中には1年時と2年時で表現が異なるが内容が似ているもの(例：1年時「明るい」、2年時「ずっと笑ってられる」)もいた。1年時と2年時で一部が共通しているもの(例：1年時「明るい」、2年時「明るい、パソコンが得意」)は8名であった。変化しなかった15名のうち、1年時と2年時の描出内容が同じだったものが4名(8.0%)、1年時と2年時ともに「ない」と回答していたものが11名(22.0%)であった。一方、2年時のインタビューで、1年時に好きと回答した具体的な描出内容を伝え、「今でも好きか」をたずねたところ、今でも好きという回答は40名(81.6%)、今では好きではないという回答は6名(12.2%)、わからない3名(6.1%)であった。このように自己の肯定的側面に関して、1年時と2年時で描出された回答内容の70%が変化していたものの、前年度の回答内容が今でも好きという回答が多く、1年間で自己の肯定的側面の内容が変化しているとはいえないことが明らかになった。

(4) 本当や偽の自分についての認識

1年目質問紙調査結果

自己の真正性に関する意識について：意識したことが「ある」「なし」と学年、性別のクロス表を作成し、²検定および残差分析を行った。その結果、学年による偏りは有意ではなかったが、4つの質問項目ともに男子よりも女子の方が意識したことがあると選択するものが有意に多かった。次に自己の真正性に関する意識によってコンピテンス得点に差が見られるかを検討するために、4つの質問項目について、性別ごとに一要因の分散分析を行った。その結果、男子では「本当の自分」と「にせの自分」について意識したことがある人の方がいない人よりもコンピテンス得点が低く、女子では4つの質問項目すべてにおいて、意識したことがある人の方がコンピテンス得点が低かった。

質問紙およびインタビューの両方を実施した対象者の結果

a) 「本当の自分」を意識し始めた時期について：中学1年時の質問紙調査で「本当の自分」が「ある」と答えた者のうち、意識し始めた時期について答えた者の時期の分布を検討したところ、最も回答した人数が多かったピークの時期は、小学校3年生と、小学校6年生から中学校1年生にかけての時期であった。時期としては思春期を挙げる者が多いものの、小学校3年生頃と答える者も少なからずあるということがわかった。b) 「本当の自分」および「にせの自分」の有無について：「本当の自分」「にせの自分」ともに、中学1年時には「ある」とし2年時には「ない」とする者のほうが、中学1年時には「ない」

とし2年時には「ある」とする者よりも多い傾向が示された。つまり中学1年時には「本当の自分」や「にせの自分」があると答えていて2年時になると「ない」と答えるようになる者が、その逆パターンよりも多いことがわかった。c)「本当の自分」と「にせの自分」の有無の関係について：中学1年時と2年時でそれぞれ、「本当の自分」と「にせの自分」がともに「ある」、「本当の自分」のみ「ある」、「にせの自分」のみ「ある」、「本当の自分」と「にせの自分」はともに「ない」の4群に分類して、McNemar 検定を行った。その結果、2年時においてのみ有意差が認められ、「本当の自分」はあるが「にせの自分」はないと答えた者のほうが、「本当の自分」はないが「にせの自分」はあると答えた者よりも多かった。d)「本当の自分」の理由について：関係や状況によって1)自分が変わるか否か(違うか否かなどを含む)2)自分を出すか否か(言えるか否か、見せるか否か、隠すか否かなどを含む)3)自分を変えるか否か(偽るか否か、演じるか否か、合わせるか否かなどを含む)4)その他という4つパターンに分類された。1年時・2年時それぞれで本当の自己の有無と理由に関して²検定を行った結果、2年時においてのみ有意差が認められ、2)自分を出すか否かへの言及が本当の自分が「ある」とする者のほうが「ない」とする者よりも比較的多く、4)その他の回答は本当の自分が「ない」とする者では多く「ある」とする者では少ないことが示された。

(5)今後の課題

本研究で3年間にわたり質問紙調査およびインタビュー調査を縦断的に行ったという点は、中学生の自己概念の特徴を明らかにする上で意義は大きいと思われる。しかし最終年度の3月に行った調査に関しては、その分析結果を本報告書に含めることができなかった。今後は、3年目の調査を含めて縦断的比較を行い、それらの結果をまとめて論文化を目指す。また本研究には、質問紙調査とインタビュー調査を組み合わせるという方法上の特色がある。しかし質問紙とインタビュー調査の比較についても一部しか行えなかったため、今後分析を進め、自己の連続性や変化を量的かつ質的に詳細に描き出していきたい。さらに本研究では、佐久間がこれまで行ってきた幼児期から児童期にかけての自己概念の発達に関する研究と同様の研究方法(質問項目)を用いているため、児童期との比較が可能である。中学生を対象とした研究結果をこれまでに明らかになっている児童期の研究結果と比較することで、青年期前期の特徴を描き出すことも可能と考える。これらの分析を進め、青年期前期の自己概念の発達の理論化を目指したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

佐久間 路子、わがまをどう受け止めるか：発達段階に応じて、児童心理、査読無、68、2014、140-146

佐久間 路子、児童期中・後期における自己の評価的側面の発達：コンピテンスとの関連に着目して、白梅学園大学・短期大学紀要、査読有、49、2013、61-68

〔学会発表〕(計4件)

中間 玲子、坂上 裕子、佐久間 路子、遠藤 由美、野田 淳子、“文化の中の自己”の発達過程を考える、日本発達心理学会第26回大会、2015年3月21日、東京大学(東京)

佐久間 路子、野田 淳子、阿久津 仁史、縦断的調査による中学生における自己概念の発達(2)：自己の肯定的側面に着目して、日本発達心理学会第26回大会、2015年3月20日、東京大学(東京)

野田 淳子、佐久間 路子、阿久津 仁史、縦断的調査による中学生における自己概念の発達(3)：本当の自分・にせの自分に着目して、日本発達心理学会第26回大会、2015年3月20日、東京大学(東京)

佐久間 路子、野田 淳子、阿久津 仁史、縦断的調査による中学生における自己概念の発達(2)：1年目の調査結果について、日本発達心理学会第25回大会、2015年3月22日、京都大学(京都)

〔図書〕(計1件)

遠藤 利彦、佐久間 路子、石井 佑子、よくわかる情動発達、2014、221

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

佐久間 路子(SAKUMA, Michiko)
白梅学園大学・子ども学部・教授
研究者番号：30389853

(2)研究分担者

松井 淳子(野田淳子)(MATSUI, Junko
(NODA, Junko)
東京経済大学・経営学部・准教授

研究者番号：90413096

(3)連携研究者

小保方 晶子 (OBOKATA, Akiko)
白梅学園大学・子ども学部・准教授
研究者番号：00442088